

冷戦体制下における中国対外金融の展開と変容：バーター貿易と外為資金管理を中心に

The transition of foreign exchange and foreign trade control in China under the Cold War: barter trade and overseas remittance

門 闖（MEN Chuang）

本研究では、1950年代初期の米国による経済封鎖・貿易禁輸への対抗を通じて形成された中国の対外経済管理システムを研究対象とし、先行研究で見落とされてきた対外金融の管理体制を検討している。研究の目的は、1950年代の中国における対外金融の展開過程を解明することを通じ、中国対外金融の歴史を再発見することにある。そのために本研究は、中国国内における銀行部門の社会主義改造と外為管理体制の構築、バーター（物々交換）貿易における銀行の役割、さらに海外華僑の国内への送金の管理をめぐる内外の繋がりという3点に着目し、冷戦下の中国における対外金融体制の形成と変容を明らかにしようとしている。この点に関して、既存研究は、中国の貿易相手国の社会主義陣営への転換や、第三世界国家への支持・援助を含む独自外交路線に注目してきたが、現在において重要性を増している対外金融の側面は十分検討されてこなかった。

令和2（2020）年度では、科研プロジェクトの一環として資料収集および研究会の立ち上げを中心に研究活動を実施した。コロナ禍で、現地への資料収集が大きく制限される中、日本で入手可能な関連資料を中心に資料の解析に着手した。また海外にいる研究協力者を含めオンライン方式の研究会合を開き、共同研究の企画を行った。そこで得られた共通認識として、中国の対外進出は、産業の移転や対外協力の拡大だけでなく、銀行、保険などの金融機関による海外進出や、通貨スワップ協定などを通じた人民元の国際化も重要な内容になっていることがあげられる。また前年度に続き、金融機関の経営状況と対外進出動向を考察した。その中で、特にアジアを中心に構築された中国銀行業のグローバルネットワークに焦点を当て、その特徴と周辺地域への影響を分析した。

これらの研究活動を通じ、既存の研究視角を改めることができ、長期的に中国経済の対外関係を考察するには、政治決定や政策の転換以外にも、中国と海外とのリンケージおよびネットワークの重要性を再認識することができた。特にこれらのネットワークの存在は多くの場合、華人や華僑など血縁、地縁の関係性によって結ばれたものであり、イデオロギー対立といった政治・安全保障上の構造問題よりも長期的な影響をもつ可能性が高いと考えられる。これから上記の問題意識をもとに定期的に研究集会を開催し、研究書物の刊行に向けて研究組織の研究活動を継続したい。